

ねりま健育会病院 医療連携室主任 小松 智行

功 績	病院・老健の前方連携を1年に亘って一人で支え切り、病院・老健共に1年8ヶ月振りに100床・80床の同時満床を達成させた功績
推 薦 者	病院マネージングディレクター 山田寿朗、 老健事務長 中村真規
推 薦 理 由	回復期リハビリ病棟、老健にとって、病床の高稼働は経営の基盤。人手がない中で双方の施設の前方連携を一人で守りながら、紹介元とのしっかりとした信頼関係を構築し、院内にも明確なゴールを掲げて協力体制を築き上げる力は秀逸である。2度のクラスターを経験しながら、1年8カ月ぶりに。病院・老健共に同時に満床を達成する勢いをつけた頑張り、理事長賞に値するものと推薦したい。

内 容

小松は、1年半前まで老健(LSねりま)の前方連携の主任を担当していたが、病院の前方連携側で、主任と担当者の突然の退職に伴い、病院・老健・通所を兼務する唯一人の前方連携となった。当時は1度目の大規模クラスターが明けたばかりで、病院・老健共に病床稼働率は低迷していたが、入院ベッドコントロールを担当しながら、地道に急性期病院や地域包括事業所に対する訪問工作を行なってパイプを再構築。病院紹介件数を月60件・老健40件ペースに復活させた。特に、数か所の医局・連携室との信頼関係を確固たるものにした。

病棟にもコロナによる疲弊感が残って、受入れの瞬発力がなかなか戻らない時期もあったが、医局と看護部に対して粘り強く状況を説明して、「軽度患者さんは、書面審査のみで直接入院を可とする」、「稼働96床を切ったら、医師面談なしも可とする」、「92床はレッドゾーンとして、1日4人入院、土曜入院も受け入れる」、「アフターコロナの患者さんは無審査で受入れる」等の協力を引き出した。

昨年11～12月は病院99床まで迫ったところで2度目のクラスターが発生してしまったが、クラスター期間内も紹介元との連携は絶やさなかったため、片側病棟での細々とした受入れしかできないにも拘らず、紹介案件は多く続き、クラスター明けの基盤を維持することができた。

クラスター明けの3月は、病院76床・老健56床と底辺からの再構築となったが、「GW入りまでに96床を固めましょう」、「6月に100床として、今期予算の基盤を作りましょう」と院内にゴールを明示。病棟も小松の旗振りに応えて、職員の人練りが厳しい中でも、4名入院や重介助患者も積極的に受け入れる等、協力体制を構築し、6月に病院100床・老健80床の満床を共に達成した。

また、並行して、育休から復帰後、初めて病院側の前方連携に配属されたMSW2名を指導して、短期間で戦力に育て上げ、老健の新任担当1名もサポート中。管理職として、部下の戦力化にも力を発揮している。